

## 神楽坂花街における歴史的建造物の残存状況と花街建築の外観特性

花街 神楽坂 歴史的建造物  
戦後建築 残存状況

正会員 ○ 松井 大輔\* 同 後藤 智香子\*  
同 吉田 健一郎\*\* 同 神原 康介\*  
同 傅 舒蘭\* 同 中島 伸\*  
同 窪田 亜矢\*\*\*

## 1. 研究の背景と目的と方法

神楽坂花街は明治初期に起源を持つ花街で、東京都心に残存する数少ない歴史的市街地のひとつである。まちづくり活動が非常に盛んな地域であり、まちづくり憲章や協定、地区計画など多くの成果を生んできた<sup>1)</sup>。そのため、まちづくりや市民参加に関する研究が多く行われている<sup>2)</sup>。ところが、これまで歴史的市街地という視点から神楽坂の町並みを評価した研究はなかった。これは第二次世界大戦時の空襲により戦前の町並みが失われたためと考えられるが、戦後65年の年月が経過した現在、戦後すぐに復興された神楽坂の町並みはすでに歴史的な価値を有していると言えるのではないか。そこで本研究は花街・神楽坂における歴史的建造物の残存状況と花街建築の外観特性を明らかにすることで、今後の神楽坂における花街文化を活かしたまちづくり活動の基礎的資料となることを目的とする。本研究は花街の歴史的建造物の外観調査を行った先行研究<sup>3)</sup>を参考に、まず文献資料から花街の都市基盤の変化を特定した後に、目視によって歴史的建造物を推定し、その外観特性の把握を行う。

## 2. 大戦前後の花街の範囲と街区割りの変化

戦前の神楽坂花街の範囲は、1929年の全国花街めぐり<sup>4)</sup>によると“神楽坂三丁目、上宮比町、肴町、及び若松町の四箇町に跨って居るが、面積にすれば縦横ともに三町に足らぬ区域”だったとされる。これは現在の神楽坂3～5丁目と若宮町にあたる<sup>1)</sup>。一方、1952年の火災保険特殊地図<sup>5)</sup>(以下、火保図)における花街建築<sup>6)</sup>の分布を確認すると図1のようになる。ここでも神楽坂3～5丁目を中心に花街建築が分布しており、戦前と戦後の神楽坂花街の範囲に違いは無いと言える。さらに1937年<sup>7)</sup>と1952年の火保図における街路形状を比較してみたところ、路地の形状に若干の違いは見られるものの街区割りに関しても、ほとんど変化がない。これは戦災復興時に、神楽坂では区画整理が実施されなかったことが要因と考えられる。以上より、現在の神楽坂花街は戦前の花街の都市基盤を継承し、その上に成立していると言えることができる。

## 3. 神楽坂花街の歴史的建造物の残存状況

歴史的建造物<sup>3)</sup>の残存状況は神楽坂3～5丁目に範囲を限定して把握する<sup>4)</sup>。調査範囲内において目視により

確認できた建造物総数302棟のうち、92棟を歴史的建造物と推定した。歴史的建造物の割合は全体で約3割、特に神楽坂4丁目の割合が高く4割以上を歴史的建造物として抽出することができた。通り・路地別で見ると、かくれんぼ横丁沿道では半数以上が歴史的建造物によって構成されている。このほか、兵庫横丁や見番周辺においても歴史的建造物が群として残っている。さらに本多横丁から4丁目側に延びる路地沿いなど、小規模に連続した町並みが存在する。

次に、花街建築と歴史的建造物との関係性を見ていく。1952年当時、調査範囲には145棟の花街建築が存在した。その内訳は表1の通りである。総数では3丁目 が最も多く、南北両側併せて75棟であった。これは全

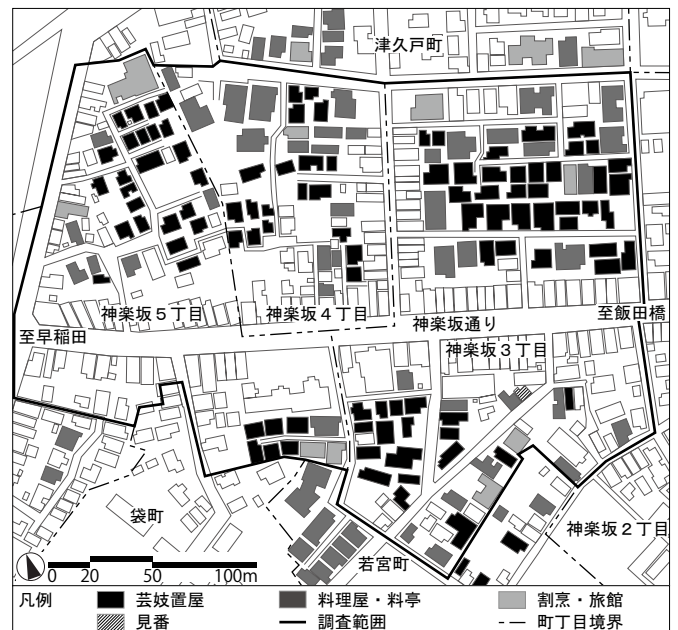


図1：昭和27年当時の神楽坂境界と花街建築の分布

表1：神楽坂における花街建築と歴史的建造物の棟数

	神楽坂3丁目		神楽坂4丁目		神楽坂5丁目		合計
	北側	南側	北側	南側	北側	南側	
建築物総数 (S27)	90棟	79棟	73棟	76棟	36棟		354棟
芸妓置屋	34棟	18棟	19棟	24棟	6棟		101棟
料亭・料理屋	12棟	10棟	14棟	6棟	1棟		43棟
(割烹・旅館)	(2棟)	(2棟)	(1棟)	(2棟)	(2棟)		(9棟)
見番	0棟	1棟	0棟	0棟	0棟		1棟
花街建築・合計	46棟	29棟	33棟	30棟	7棟		145棟
建築物総数 (H22)	90棟	71棟	66棟	33棟	43棟		302棟
歴史的建造物	32棟	16棟	29棟	10棟	4棟		92棟
歴史的建造物の割合	36%	23%	44%	30%	9%		30%
花街建築の歴史的建造物	10棟	5棟	5棟	0棟	0棟		20棟

体の1/2にあたる。他の丁目は4丁目が料理屋、5丁目が芸妓置屋の割合が高い点が特徴と言える。これら花街建築と歴史的建造物の調査結果を照らし合わせる<sup>9)</sup>と、20棟を花街建築の歴史的建造物と推定できる。かくれんぼ横丁沿道に集中しており、区域全域で見ると元々は置屋であったと思われる建物が13棟と最も多い。

#### 4. 神楽坂の花街建築の外観特性

最後に花街建築の外観特性を見ていく。神楽坂の花街建築については、木造2階建てで切妻の瓦屋根を持つ形状が典型的だと言える。外壁はリシン等によって塗装されている場合がほとんどで、木材の使用は少ない。一方、意匠には木材が使用されている。特に花街建築特有の丸太材は庇や欄干等に用いられている。リシン等の簡素な仕上げの外壁に、木材意匠をアクセントとして付加している点が神楽坂の花街建築の特徴と指摘できる。

次に花街建築を配置、入口の形状から4種類に分類した(図3)。花街建築で直接街路に面するものは少なく、街路との間になんらかの緩衝帯が設けられている点も特徴であると言えよう。例えば、「非接道型」は屋敷のように塀で囲われた前庭を持つ、最も多い形態である。ただし、ブロック塀の割合が高く、神楽坂という言葉から連想される黒板塀は修景に頼る部分が多いことがわかる。次点の「接道引込型」は屋根の付いた前庭のような空間が設けられている形態で、雨天時に訪客が濡れないための配慮とされる。

#### 5. 結論

- (1) 現在の神楽坂は、戦前までに形成された都市基盤の上に復興された花街であり、街路形状や路地のスケール、花街の範囲等は当時の花街のものを踏襲している。
- (2) 歴史的建造物は92棟確認でき、全棟数の約3割を占めた。歴史的建造物が最も集積するのはかくれんぼ横丁であり、その他にも本多横丁から伸びる横丁のように小規模な町並みが地区内に分散している。
- (3) 歴史的建造物のうち花街建築は20棟であり、かくれんぼ横丁に集中している。外観の特徴としては、簡素な仕上げの外壁に木材意匠を部分的に付加する点、街路と建物の間に緩衝帯が存在する点があげられる。
- (4) 神楽坂花街は戦後の町並みということもあり、文化財保護の対象になることは考えにくい。したがって、かくれんぼ横丁や小規模町並みを保全する自主的な制度の構築が望まれる。そのためには歴史的建造物、花街建築の価値を1棟ずつ評価することが重要であり、登録文化財制度を網的に利用していくことが有効と考えられる。

**追記**  
 なお、本研究は平成22年度科学技術研究費補助金(挑戦的萌芽)22656131の助成による研究成果の一部である。また、調査においては地元建築家の山下馨氏、

鈴木俊治氏、渡邊義孝氏にご助言を頂いた。ここに記して謝辞としたい。

#### 補注

- (1) 若松町という名称の町は神楽坂に無いため、若宮町の誤植と推測できる。
- (2) 火保図には芸妓置屋が「妓」、料理屋が「料」、と記されている。これらに待合茶屋を加えて三業と呼ぶが、1948年に禁止されたため神楽坂には存在しない。本研究では、以上の二業に関わる建造物と見番を併せて花街建築と定義する。
- (3) 神楽坂花街は戦後に建てられた建造物で構成されるため、本研究では歴史的建造物を「戦後に建築され、かつ登録文化財の判断基準である築50年を満たす建造物」と定義する。そのため、類似研究よりも歴史的建造物の割合が高い。
- (4) 若宮町と津久戸町の花街関連建築物群は小規模なため調査範囲からは除外。
- (5) 建造物の位置、形状(平面・立面)、玄関位置などから推測した。

#### 参考文献

- 1) 中島伸等(2010)「まちづくりルール策定の取り組みの変遷と現況-神楽坂における動態的都市保全その1-」日本建築学会大会学術講演梗概集F-1, pp.193-194
- 2) 窪田亜矢(2003)「各主体の動向に基づくマンション紛争防止に向けた考察-神楽坂超高層マンション計画を事例として-」日本都市計画学会論文集No.38-1, pp.52-57
- 3) 佐藤正宗・岡崎篤行(2009)「近世の町割を継承した近代花街の都市空間と建築特性-港町新潟の古町花街を対象として-」日本建築学会大会学術講演梗概集F-1, pp.781-782
- 4) 松川二郎(1929)「全国花街めぐり」誠文堂, pp.69-73
- 5) 都市製図社(1952)「火災保険特殊地図-新宿区(11)神楽坂方面-」1/600
- 6) 都市製図社(1937)「火災保険特殊地図-牛込區(2)-」1/1000

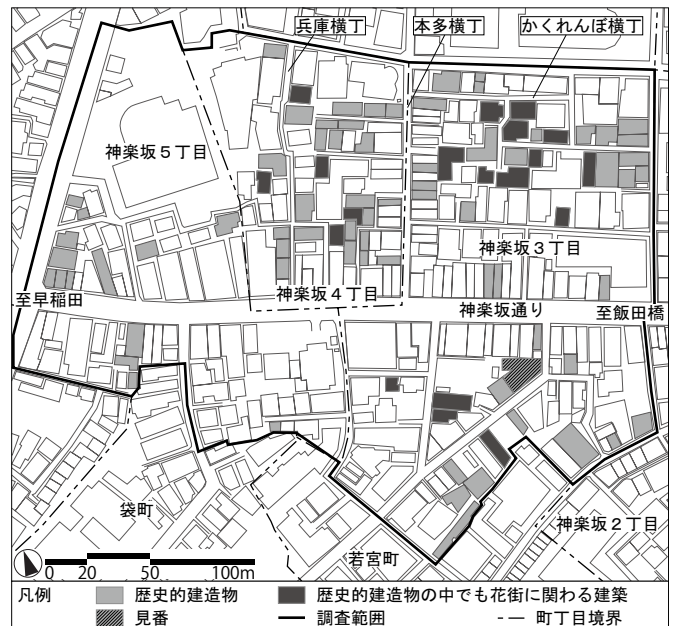


図2: 神楽坂における歴史的建造物と花街建築の残存状況

表2: 花街建築の外観形状の傾向(単位: 棟)

元用途	置屋13/料亭6/他1	屋根材	瓦15/トタン4/他1
現用途	住宅9/飲食9/他2	外壁材	リシン14/モルタル5/板1
構造	木造20	木材意匠	使用8(玄関庇5/2階庇3)
規模	総2階14/2階5/3階1	丸太材	使用9
屋根形状	切妻16/入母屋3/寄棟1	塀素材	ブロック6/黒板4
入り面	平入11/妻入9		

類型	非接道型	半接道型	接道型	接道引込型
平面形状				
凡例				
写真				
棟数	7棟	4棟	3棟	6棟

図3: 配置・入口形状からみた花街建築の分類

\* 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 博士課程

\*\* 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 修士課程

\*\*\* 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 准教授・工博

\*Doctor Course, Dept. of Urban Eng., Faculty of Eng., Univ. of Tokyo

\*\*Master Course, Dept. of Urban Eng., Faculty of Eng., Univ. of Tokyo

\*\*\*Assoc. Prof., Dept. of Urban Eng., Faculty of Eng., Univ. of Tokyo, Dr. Eng.